私の水平社宣言

筑山中学校3年　平島　大聖

「人の世に熱あれ。人間に光あれ。」

今年の八月六日、私はステージで、この言葉を叫んだ。

今年の夏、私は中学校の夏休み中に行われる「平和劇」の準備や出演、運営などを行う平和集会実行委員になった。私がそれに手を挙げた理由は、クラスメイトや同級生、後輩たちに、差別や戦争の苦しさ・痛み・平和の尊さを伝えたかったからだ。

今年の劇のタイトルは「寄せ鍋」。取り上げるテーマは、福島原発事故の風評被害、性的マイノリティー、そして部落差別だ。タイトルには、「一人ひとりが力を出せば、良い味を出せる。」という意味が込められている。私は、キャストの役をいただき、西光万吉という人物を演じることになった。西光万吉は、約百年前、「全国水平社」を創立したメンバーの中心人物だという。私は、西光万吉という人や全国水平社のことをよく知らなかったので、「寄せ鍋」の台本を何度も読んだりインターネットを使って調べてみたりした。

西光万吉は、部落差別をうけてきた奈良県の村の出身であり、県立中学校や東京の絵画教室で部落差別をうけ、その苦しみを味わってきた。一度はそこから逃げ出したものの、同じく部落差別をうけてきた阪本清一郎や、駒井喜作

らと共に全国水平社を創立した。西光万吉がつくった全国水平社は、部落差別をなくし、この世の中の人々全員が幸せになることを求めてつくられた組織である。水平社創立大会では、「長い間差別をうけ続け、人の世がどんなに冷たいか、人間を大切にすることがどういうことかをよく知っている私達が今こそ立ち上がるのだ。」と宣言した。これが水平社宣言である。西光万吉が、自分が部落差別をうけ続けてきたという事実から逃げることをせず、あらゆる差別をなくしていこうと訴えた。これらの行動は、相当な覚悟が必要だったのだろうと思うが、やってのけたことへの勇気と行動力に私は感銘をうけた。その姿を精一杯演じたいと思い、練習に励んだ。

練習で指導をうけ、西光万吉のイメージをつかんだ私は本番に臨んだ。残念ながら、コロナ禍の中で無観客にはなったが、劇のビデオを夏休み明けに全校生徒が見ることになるので、見る人みんなに夏休みの練習の成果や、差別の苦しさなどを伝えようと思い、ステージに立った。本番ではビデオを撮られているということもあって、とても緊張したが、セリフの一つ一つに思いを込め、部落差別と闘ってきた西光万吉の姿を、熱く演じることができたと思う。劇の後にあった意見交流会では、劇の中で自分の演じた役への思いを語ったり、「平和劇」を通して感じた他の人の意見を聞いたりすることができ、有意義な時間となった。このビデオを見た人にとって、あらゆる差別やその中の部落差別と闘ってきた水平社のことなどについて、「正しく知る」きっかけとなってほしい。

私は平和集会実行委員を通して、差別の苦しみや痛み、平和の尊さ、差別を無くしていくための勇気、そして物事

を正しく知ることの大切さを実感することができた。あらゆる差別が無くなるまでの道のりはまだ遠いけれど、平和劇を見た人の意識を変えたり周りの人に正しいことを伝えたりするなど、百年前に西光万吉が願った、この世の中の人々全員が幸せな世界をつくるために、今自分ができることから始めていきたい。

「人の世に熱あれ。人間に光あれ。」